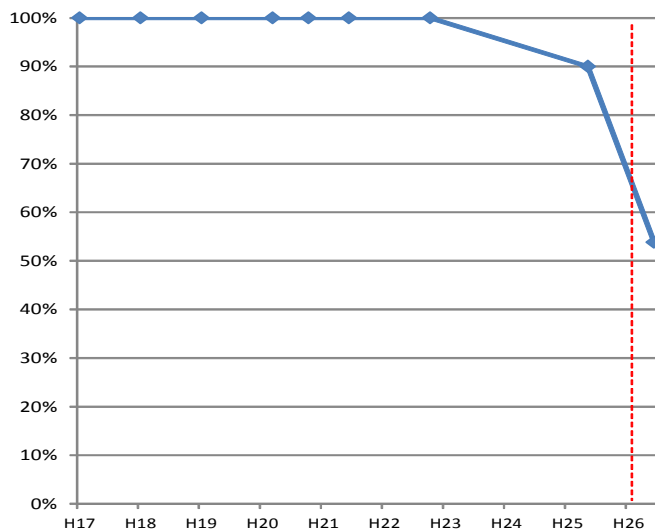


樹種名	カシワ	
科 目	ブナ科	
学 名	<i>Quercus dentata</i>	
分 布	北海道から九州までの温帯から暖帯にかけて生育する。痩せた乾燥地でも生育することから、火山地帯や海岸などに群落が見られることが多い。	
樹木特性	陽樹であり、低地から山地に生育し、海岸林の主要な樹種となるほか、山火事等の攪乱や塩害等のストレスに強い。	
用 途	建築材として利用。葉は、かしわ餅の葉として使用。	
植栽本数 (植栽密度)	13 本 (他樹種との混植)	
特 徴	【樹 形】 落葉中高木であり、樹高は 15m 程度となる。葉は大きく、縁に沿って丸く大きな鋸歯があるのが特徴。ドングリはクヌギに似て丸く、殻斗は先がとがって反り返る包が密生する。秋に枯れた葉が春までついたまま、新芽が出るまでは落葉しない。 日本の海岸線の防風林には一般的にクロマツが用いられるが、北海道の道北や道東など寒冷でクロマツが育たない地域では、防風林を構成する樹種としてカラマツとともにカシワが採用されることがある。カシワは落葉樹だが、秋に葉が枯れても翌年の春まで葉が落ちないため、冬季の強風を防ぐ効果を果たす。	 
試験地での様子	ポット苗を植栽し、シカによる新芽の食害が多く見られたことから、現存率は 54 %程度であった。このことによって 8 年を経過しても枯死にはいたらないが、樹高 1.5m 未満のものが多く存在し平均樹高を下げる結果となっている。また、コウモリガやカミキリムシ類による穿孔被害も見られたが、枯死までにはいたらなかった。	
被 害	シカによる新芽の食害が成長阻害の要因となったが枯死までは至っていない。根元にコウモリガやカミキリムシ類による穿孔被害が発生した。	

カシワ 現存率



【現存率】

植栽後、シカによる新芽の食害が見られ、成長に悪影響を及ぼしているものもあるが、枯死までには至っていない。

平成 26 年度に毎木調査を実施した結果、現存率は 53.8%であった。

※ 赤線は、選定した調査木から毎木調査へと測定方法を変更したため、データの連続性はない。

【根元・胸高直径】

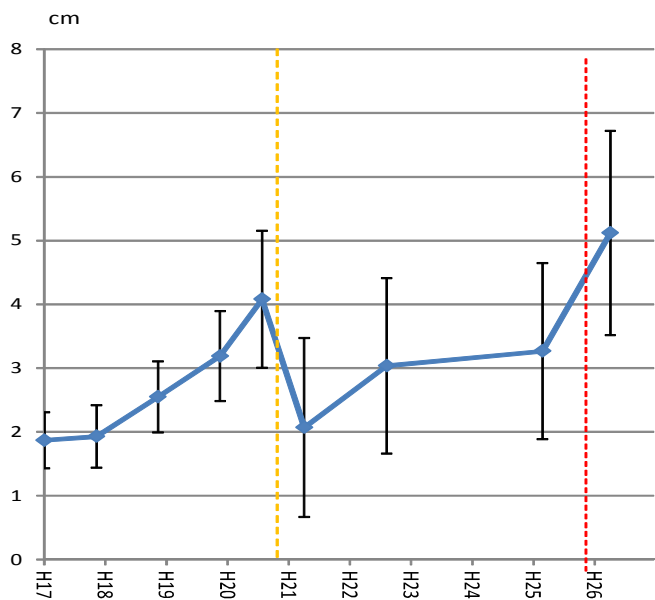
H25.6 時点で数値が減少している理由としては、胸高直径の大きい個体が枯死したためである。

平成 26 年度に毎木調査を実施した結果、平均胸高直径は 5.12 cmであった。

※ 赤線は、選定した調査木から毎木調査へと測定方法を変更したため、データの連続性はない。

※ オレンジ線は、根元から胸高へと測定箇所変更のため、データの連続性はない。

カシワ 根元・胸高直径



【樹 高】

梢端部をシカに食害され、樹高成長が不良となっている。

平成 26 年度に毎木調査を実施した結果、平均樹高は 4.09m であった。

※ 赤線は、選定した調査木から毎木調査へと測定方法を変更したため、データの連続性はない。



《プチ情報》

葉には芳香があり、さらに翌年に新芽が出るまで古い葉が落ちない特性から「代が途切れない」縁起物とされ、塩漬けにして柏餅を包むのに用いられる。

英語では Japanese Emperor Oak, Kashiwa Oak, Daimyo oak, chêne de Daimyo (フランス語) などと称する。

日本では漢字では「柏」と書くことが多いが、漢字の語源から言うと、柏の字の傍の「白」は色の「しろ」ではなく、球果（松かさ状の果実）をかたどった象形文字で[要出典]、「柏」はヒノキ科およびスギ科のさまざまな針葉樹を意味する。コノテガシワのこと、あるいはシダレイトスギ、いぶき・さわら・あすなろなど、松以外の針葉樹の総称である。戦前の植物学では、イチイ科からヒノキ科までの針葉樹は「松柏綱」と呼んでいた。現代中国語ではヒノキ科を柏科という。「松柏類」

「香柏（ヒマラヤスギ属、翻訳文学ではしばしばレバノンスギ）」「真柏（しんぱく）・柏真（びやくしん、イブキ）、コノテガシワ」などの柏はヒノキ科の意味である。漢詩などでは、常緑樹であることから、変わらないことの比喻に使われる。千葉県柏市では、シイと共に市の木に指定されている。名古屋市以西では鶏肉のことを「カシワ」と呼ぶ事があるが、これは地鶏の羽色が柏の葉の紅葉の色に似ていることからこう呼ばれる。

カシワ 樹高

